

〈現代性〉の見地から、〈共生〉の道を切り拓く。

新潟大学大学院 2026 現代社会文化研究科

大学院(博士後期課程)案内

博士後期課程 | 人間形成研究専攻 共生文化研究専攻 共生社会研究専攻



NIIGATA UNIVERSITY
GRADUATE SCHOOL OF MODERN SOCIETY AND CULTURE

新潟大学大学院 現代社会文化研究科

大学院(博士後期課程)案内

GRADUATE SCHOOL OF
MODERN SOCIETY AND CULTURE
NIIGATA UNIVERSITY

CONTENTS

研究科長挨拶	1
アドミッション・ポリシー	2
学位取得までのプロセス(履修科目等)	4
専攻紹介	
博士後期課程	5
人間形成研究専攻	
共生文化研究専攻	
共生社会研究専攻	
入学試験(博士後期課程)について	11
キャンパスライフ～在学生からのメッセージ～ ...	12
修了生の声	13

研究科長挨拶

Message from the Dean



新潟大学大学院現代社会文化研究科長

Dean of the Graduate School of Modern Society and Culture,
Niigata University

番場 俊 BAMBA Satoshi, Ph.D.

(ばんば さとし)

先日、とある高等教育関係のシンポジウムにオンラインで参加していたときのこと。教育上の重要なテーマに関する会議だからもちろん真面目に参加していたつもりだが、この種の催しは、半分は主催者への義理で参加することがつねであり、また、自室でのZoom参加ということもあって、あるいは少々居眠りしながらであったかもしれない。あるパネリストのひとことが耳を撃った。あわててパソコンに向きなおし、まだつづいている講演をよそに、ブラウザを開いて検索する。数日後に届いた書物のなかで、戦後日本を代表する思想家・鶴見俊輔は、15歳で渡米し、大学で学んでいた折に出会った一つの言葉から受けた衝撃について回想していた。「戦前、私はニューヨークでヘレン・ケラー（1880-1968）に会った。私が大学生であると知ると、「私は大学でたくさんのことを学んだが、そのあとたくさん、学びほぐさなければならなかった」といった。学び（ラーン）、のちに学びほぐす（アンラーン）。「アンラーン」ということばは初めて聞いたが、意味はわかった。型通りにセーターを編み、ほどいて元の毛糸に戻して自分の体に合わせて編みなおすという情景が想像された」（『新しい風土記へ——鶴見俊輔座談』朝日新書、2010年）。

私たちは学んだ（learn）ものを学びほぐさ（unlearn）しなければならない、——鶴見はそういつている。学んだことをいったん忘れること。型通りに修得した知識を解体し、セーターをほぐして編みなおすように、私たちひとりひとりの身の丈にあった知識として新たに築きなおすこと。身の丈にあった、というのは、頭の悪い私たちにも分かるように矮小化する、ということではない。そうではなくて、私たちひとりひとりが抱えている問題の複雑さ、その特異性にしがたって、よそから借りてきた知識を組み立てなおすこと、知識をその他者との出会いのなかで鍛えなおすということだろう。「学びほぐす」という日本語が英語“unlearn”の訳語としてはややこじつけめいているというのであれば、端的に「忘れる」でもかまわない。私たちは学んだことを忘れなければならないのだ。新たに学びなおすために。

ここまで考えてくると、これはむしろ大学より大学院にふさわしい教えなのではないかという気がしてくる。「学びほぐす」ための場としての大学院——そんなキャッチフレーズが頭に浮かぶ。大学がなにかを「学ぶ」場としてあるとすれば、大学院は——とりわけ人文社会科学の諸領域にまたがる課題探究型の総合型大学院としてつくられた私たちの新潟大学大学院現代社会文化研究科は——、私たちがこれまで学んできたことをいったん忘れ、隣接する他領域との対話、先生たちとの、学友たちとの豊かな対話を繰り返しながら、知識を鍛えなおす「学びほぐし」の場としてあるのではないか。それはなにも従来の学科を無理にでも否定しなければならないということを意味しない。同じ書物のなかで鶴見の対談相手である中国の日本政治思想史研究者・孫歌（スン・グー）はいっている。「私は気軽に「越境」を考えていません。そして「越境」ということは学科と学科の間というより、学科の内部で行われると考えています。それはつまり、学科を崩すとか併合するとかというのではなくて、古く見られる学科を「開ける」ということです」。私たちの「現社研」が、そんな「学びほぐし」と「越境」の場になることを期待したい。

新潟大学大学院現代社会文化研究科 アドミッション・ポリシー

本研究科の各専攻は、それぞれに下記の目的によって教育研究を進めています。そのような教育研究の目的に応じて、本研究科は、専門職業人又は研究者となる意欲と可能性を有した者を募集します。

博士後期課程

【人間形成研究専攻】

家庭、学校、又は社会等における人間形成に関する諸課題を、生活環境・文化・教育の観点から分析し解決する能力を涵養する。養われた能力により、人間形成についての高度な専門的知識と課題解決能力を有する高度な専門職業人又は研究者を育成する。

【共生文化研究専攻】

世界の諸地域の言語・歴史・文化に関する諸課題を、地域間の相互理解と相互発展という共生の観点から多角的かつ総合的に分析し解決する能力を涵養する。培われた能力により、日本、アジア、そして欧米等の言語・歴史・文化についての高度な専門的知識と課題解決能力を有する高度な専門職業人又は研究者を育成する。

【共生社会研究専攻】

国際社会や地域社会における、法、政治、または経済等のシステム及び制度に関する諸課題を、社会間の相互理解と相互発展という共生の観点から多角的かつ総合的に分析し解決する能力を涵養する。獲得された能力により、法学又は経済学の高度な専門的知識と課題解決能力を有する高度な専門職業人又は研究者を育成する。

教育目標

課題探求能力の育成

現代社会文化研究科の教育目標は「課題研究能力の育成」です。

現代の社会は、自己責任型社会へ急速に転換しつつあります。自己責任型社会では、時代の変化に、私たちが主体的に対応できる能力が求められます。それには、自分で学ぶ能力を基礎にして、将来の課題を探求し、幅広い視野から総合的な判断を下すことができる課題探求能力を習得する必要があります。

2つの 理念

〈現代性〉と〈共生〉

本研究科の名称は、「現代」と「社会文化」によって構成されています。この名称は、2つの理念を表現しています。

理念のひとつは〈現代性〉です。〈現代性〉とは、課題設定の方法についての理念を示します。学生は、社会と文化の全領域から自分の課題を設定し、その課題の解決の仕方を、「現代」の問題と関連付けて研究します。

理念のふたつ目は〈共生〉です。〈共生〉とは、課題解決の方向性を示す理念です。「現代」の課題を解決するためには、社会と文化について、人間と人間、人間と自然が共存できるシステムを構想しなければなりません。その理念が〈共生〉です。

6つの特色

「教育目標」と「2つの理念」を実現するために、本研究科は、6つの特色を備えています。

1

課題探求型の
総合型大学院

人文科学・法学・経済学・教育科学にまたがる多数の教員を擁しています。学生は、自分の研究課題に沿う指導を受けることができます。

2

一人ひとりに
合わせた指導体制

学生一人ひとりに履修指導委員会（主指導教員1人・副指導教員2人によって構成されます）を設け、学生の研究課題に応じた履修指導と論文指導を行います。

3

学際型の
博士後期課程

課題を探求するには、専門性と学際性との調和のとれた能力を有する必要があります。

博士後期課程では、課題解決能力の獲得を目指します。そのことから、学際性を主・専門性を副とするカリキュラムを組みました。教員・学生による研究プロジェクトにも参加します。

4

課題に応じた学位

各自の研究課題に応じた学位を取得できます。

博士後期課程では、博士（学術）を基本としつつ、博士（文学）、博士（法学）、博士（経済学）、博士（教育学）のいずれかから取得できます。

5

社会人や外国人にも
開かれた大学

社会人や外国人を積極的に受け入れるために、入学試験では、社会人や外国人を対象にした特別入試を実施しています。また、社会人学生に対しては、必要に応じて、夜間授業等を開講しています。

6

学位取得に向けた
履修体制

博士後期課程では3年の標準修業年限で学位を取得する履修体制を組んでいます。短期修了（修業年限の特例として、優れた研究業績を上げた者に適用）や長期履修の制度もあります。

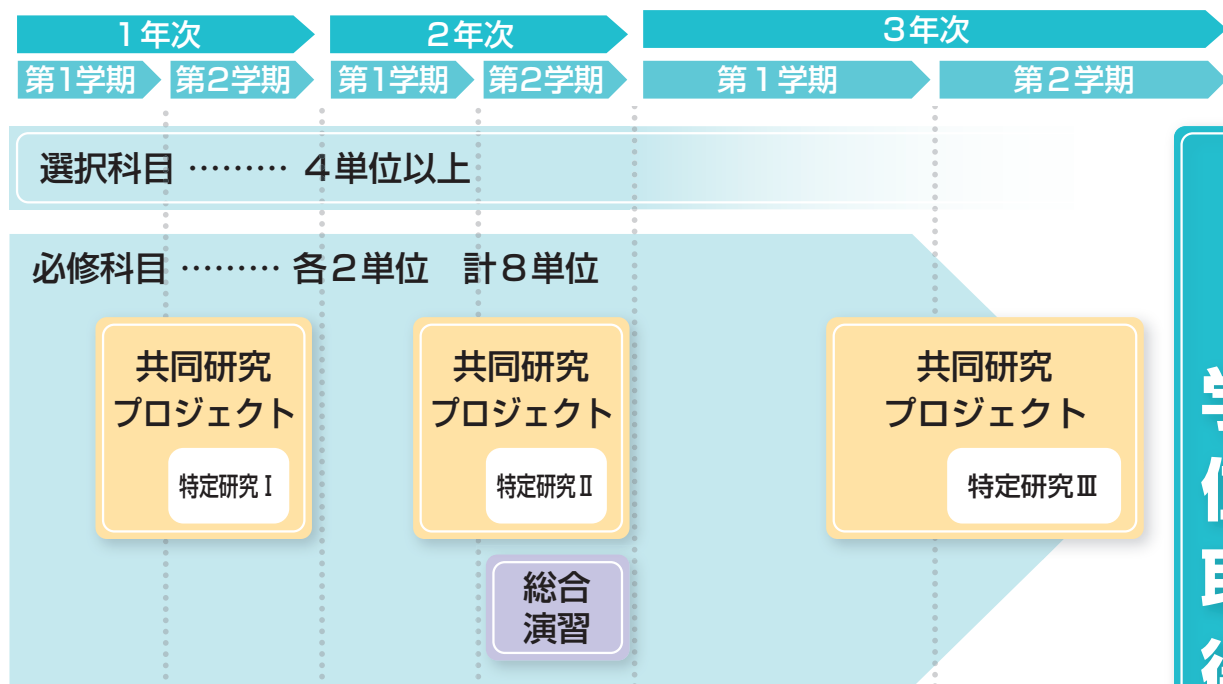
学位取得までのプロセス(履修科目等)

大学院学生は、博士後期課程において必要な科目を履修して単位を取得し、博士論文を作成し審査（試験）に合格することを目的とします。

博士後期課程

博士後期課程では、5～10頁に掲載した授業科目（選択科目）のほかに、「特定研究Ⅰ」「特定研究Ⅱ」「特定研究Ⅲ」「総合演習」を必修科目として設けて、専門的学力を獲得し、博士号を取得することを目標としています。

※共生社会研究専攻日本酒学分野を専攻する学生は、特定研究6単位及び総合演習2単位に加え、分野必修科目として「日本酒学特論Ⅰ」、「日本酒学特論Ⅱ」（各1単位）、「日本酒学博士セミナーⅠ」（2単位）の4単位、分野選択必修科目として「日本酒学国際特別研究」（1単位）、「日本酒学博士セミナーⅡ」、「日本酒学博士セミナーⅢ」（各2単位）のうち2単位以上、及び専攻内他分野開講科目2単位以上、計16単位以上を修得しなければなりません。



【科目の概要】

「特定研究Ⅰ」「特定研究Ⅱ」「特定研究Ⅲ」: 学生が、本研究科の教員と学生による小規模な研究会（共同研究プロジェクト）に参加して、博士論文作成の準備を進める科目。

「総合演習」: 学生が教員、他の学生の前で研究発表を行い、そこでの質疑応答を通じて発表者の当該研究課題に対する理解を深め、博士論文のブラッシュアップにつなげる科目。

* 学術誌『現代社会文化研究』の刊行
博士論文の完成に向けて、本研究科では学術誌や学術報告書への公表を支援しています。その公表の場として、本研究科は学術誌『現代社会文化研究』を年2回刊行しています。

〈論文提出に向けた手続き・審査〉

第1ステップでは、3年次の1学期に「学位論文提出資格審査申請書」を提出し、これにもとづき口述試験及び筆記試験が行われ、申請者の研究能力や学力が審査されます。その審査で合格して、申請者は「学位論文提出資格者 (Ph. D. Candidate)」となります。さらに「博士論文草稿」の提出により、履修指導委員会の指導を受ける第2ステップに進みます。そして第3ステップとして、完成させた「学位論文」の提出があると、論文審査と口述試験により、学位にふさわしい能力を有しているかどうか審査されます。その審査で合格と判定されると、博士の学位が授与されます（学位の種類は、各専攻紹介の頁を参照）。

学位論文



学位取得（博士）

専攻紹介

— 博士後期課程 —

博士後期課程 【人間形成研究専攻】

人間形成研究専攻は、家庭・学校・社会等における人間形成に関する課題を、生活環境・文化・教育の観点から分析・解決する能力を涵養し、人間形成についての高度な専門的知識と課題解決能力を有する高度専門職業人及び研究者を育成します。

取得できる学位 博士(学術)、博士(文学)、博士(教育学)

人間形成文化分野

知覚情報研究 (新美 亮輔)	成人教育思想研究 (未定)	行動変容研究 (神村 栄一)	住環境研究 (未定)
知覚実践研究 (中嶋 豊)	科学技術論研究 (佐藤 靖)	認知行動病理学研究 (田中 恒彦)	食環境研究 (未定)
性格形成研究 (福島 治)	文化人類学研究 (園田 浩司)	対人援助研究 (未定)	水中運動研究 (大庭 昌昭)
性格測定研究 (並川 努)	メディア社会文化研究 (古賀 豊)	健康行動研究 (天野 達郎)	健康支援科学研究 (笠巻 純一)
認知発達研究 (小林 恵)	社会情報システム研究 (中村 隆志)	運動機能研究 (牛山 幸彦)	健康運動研究 (村山 敏夫)
現代社会研究 (松井 克浩)	ジェンダー研究 (杉原 名穂子)	身体発達研究 (未定)	健康行動形成研究 (森 恭)
認識哲学研究 (阿部 ふく子)	社会ネットワーク研究 (未定)	身体思想研究 (未定)	健康体操研究 (檜皮 貴子)
比較思想形成研究 (未定)	地域社会学研究 (伊藤 嘉高)	衣環境評価研究 (杉村 桃子)	健康教育研究 (笠井 直美)
宗教思想研究 (青柳 かおる)	認知形成研究 (中島 伸子)	衣環境材料研究 (中村 和吉)	コミュニティヘルス研究 (田中 誠二)
	認知思想研究 (未定)		
	家族力動論研究 (未定)		



現代教育文化分野

教育行政研究
(雲尾 周)

教育測定研究
(未定)

教育開発研究
(澤邊 潤)

教育政策と教育法研究
(未定)

キャリア教育研究
(未定)

生涯学習研究
(相庭 和彦)

特別支援教育研究
(未定)

障害児者支援研究
(有川 宏幸)

障害児者コミュニケーション支援研究
(入山 満恵子)

障害児者生理的発達支援研究
(渡邊 流理也)

障害児者学習・行動支援研究
(村中 智彦)

社会科授業開発研究
(田中 一裕)

数学教育研究
(阿部 好貴)

英語教育評価研究
(未定)

英語教育読解指導研究
(加藤 茂夫)

読書教育研究
(足立 幸子)

音楽演奏表現研究
(鈴木 賢太)

音楽実践研究
(鈴木 愛美)

音楽創作研究
(清水 研作)

音楽表現研究
(田中 幸治)

演奏表現研究
(宇野 哲之)

音楽教育学研究
(工藤 千晶)

美術表現研究
(未定)

現代美術表現研究
(丹治 嘉彦)

美術教育研究
(柳沼 宏寿)

デザイン表現研究
(橋本 学)

現代日本画造形表現研究
(永吉 秀司)

家庭科教育方法研究
(未定)

教育哲学研究
(福田 学)

教育社会学研究
(古田 和久)

教育方法学研究
(岡野 勉)

教授学習研究
(未定)

教育史研究
(未定)

社会科教育史研究
(釜本 健司)

経済教育研究
(柴田 透)

博士後期課程 【共生文化研究専攻】

共生文化研究専攻は、世界の諸地域の言語・歴史・文化に関する課題を、相互理解と相互発展という共生の観点から、多角的・総合的に分析・解決する能力を涵養し、日本、アジア、欧米等の言語・歴史・文化についての高度な専門的知識と課題解決能力を有する高度専門職業人及び研究者を育成します。

取得できる学位 博士(学術)、博士(文学)

地域共生文化分野

環日本海地域関係研究
(中村 元)

日本国家形成研究
(未定)

東アジア文化圏研究
(村上 正和)

ユーラシア文化形成研究
(白石 典之)

歴史環境形成研究
(堀 健彦)

社会地理学研究
(前田 洋介)

火山地域関係研究
(北村 繁)

朝鮮社会構造研究
(山内 民博)

アジア近代社会研究
(広川 佐保)

中国文芸文化研究
(未定)

近代朝鮮文学研究
(藤石 貴代)

環日本海民俗研究
(未定)

日本文化形成研究
(高橋 早苗)

日本芸能文化研究
(中本 真人)

日本近代言語文化研究
(三ツ井 正孝)

日本近代文芸文化研究
(未定)

日本民俗研究
(未定)

日本伝統文芸文化研究
(廣部 俊也)

日本近世社会研究
(原 直史)

書道文化研究
(岡村 浩)

東アジア書跡研究
(角田 勝久)

中国古典文学研究
(角谷 聰)

中国文化研究
(土屋 太祐)

中国言語表現研究
(干野 真一)

現代日本語動態研究
(岡田 祥平)

日本古代言語文化研究
(磯貝 淳一)

現代日本語文法研究
(池田 英喜)

中国歴史言語文化研究
(藤田 益子)

日本語教育史研究
(未定)



国際共生文化分野

欧米言語文化研究
(未定)

アメリカ社会思想研究
(高橋 康浩)

フランス思想史研究
(逸見 龍生)

機能言語学研究
(江畑 冬生)

ヨーロッパ美術文化研究
(細田 あや子)

地中海文化史研究
(高橋 秀樹)

比較文法研究
(未定)

イギリス文芸文化研究
(市橋 孝道)

英米メディア文化研究
(未定)

比較文学研究
(猪俣 賢司)

フランス文芸文化研究
(津森 圭一)

ドイツ社会文化研究
(未定)

ロシア文化研究
(未定)

表象文化研究
(番場 俊)

映像文化研究
(石田 美紀)

映像思想研究
(キム・ジュニアン)

ヨーロッパ歴史社会研究
(小林 繁子)

西洋美術史研究
(田中 咲子)

アメリカ近代小説研究
(未定)

日英語比較統語論研究
(本間 伸輔)

応用言語学研究
(大竹 芳夫)

近現代芸術研究
(甲斐 義明)

語用論研究
(山田 陽子)

英語圏文化研究
(Hadley, Gregory Stuart)

博士後期課程 【共生社会研究専攻】

共生社会研究専攻は、国際社会や地域社会における法・政治・経済等のシステム及び制度に関する課題を、相互理解と相互発展という共生の観点から、多角的・総合的に分析・解決する能力を涵養し、法学、経済学の高度な専門的知識と課題解決能力を有する高度専門職業人及び研究者を育成します。

取得できる学位 博士(学術)、博士(法学)、博士(経済学)

地域共生社会分野

比較経済思想史研究
(武藤 秀太郎)

ニュー・パブリックマネジメント研究
(未定)

公共経済学研究
(中東 雅樹)

中国経済研究
(溝口 由己)

NPO論研究
(澤村 明)

現代財政研究
(根岸 睦人)

マーケティング研究
(未定)

ゲーム理論研究
(高宮 浩司)

産業安全研究
(東瀬 朗)

情報化社会制御研究
(鈴木 正朝)

中国政治社会研究
(未定)

現代行政研究
(馬場 健)

行政理論研究
(未定)

行政法研究
(宮森 征司)

憲法研究
(上村 都)

刑法研究
(田寺 さおり)

刑事政策研究
(櫻井 香子)

民事法研究
(近藤 明彦)

労働経済学研究
(張 俊超)

租税法・財政法研究
(今本 啓介)

刑事訴訟法研究
(稲田 隆司)

会社法研究
(吉田 正之)

商事法研究
(未定)

企業法研究
(内田 千秋)

地域社会研究
(内田 健)

災害地理研究
(未定)

上級ミクロ経済学研究
(山崎 剛志)

上級マクロ経済学研究
(長谷川 雪子)

医療制度研究
(田中 伸至)

医療経営研究
(堀籠 崇)

組織行動論研究
(岸 保行)

経営組織研究
(未定)

経営戦略論研究
(伊藤 龍史)

成年後見法研究
(上山 泰)

社会保障政策研究
(未定)



国際共生社会分野

比較労使関係研究
(木南 直之)

比較政治制度研究
(未定)

家族法制研究
(田巻 帝子)

市民社会基本法研究
(未定)

契約法研究
(未定)

法社会研究
(小泉 明子)

ファイナンス法研究
(田中 幸弘)

刑事制度論研究
(丹羽 正夫)

倒産法研究
(未定)

損害賠償法研究
(岩寄 勝成)

国際経済法研究
(未定)

知的財産法研究
(渡邊 修)

開発途上国経済研究
(石川 耕三)

北米憲法研究
(未定)

ロシア経済研究
(道上 真有)

環境経済研究
(藤堂 史明)

技術経営研究
(白川 展之)

租税理論研究
(未定)

アメリカ経済研究
(大森 拓磨)

国際経済研究
(未定)

分析的会計研究
(加井 久雄)

EU経済研究
(藤田 憲)

応用ミクロ経済学研究
(濱田 弘潤)

比較組織文化研究
(未定)

政治思想研究
(向山 恭一)

国際政治史研究
(神田 豊隆)

国際人権研究
(渡辺 豊)

現代憲法理論研究
(未定)

日本政治外交史研究
(稲吉 晃)

国際関係論研究
(未定)

西洋経済史研究
(未定)

日本酒学分野

経済学から見た酒
(澤村 明)

酒とベンチャービジネス
(伊藤 龍史)

酒蔵組織と経営
(岸 保行)

入学試験について

現代社会文化研究科の学生募集は、下記のとおり行います。詳細は現代社会文化研究科HPにて公開している「**学生募集要項**」をご確認ください。

(入学試験に関する問い合わせ先：人文社会科学系大学院学務係 025-262-6166・7895)

博士後期課程

選抜方法

入学者選抜方法の概要は以下のとおりです。

一般選抜	「修士論文」を提出した者については、書面審査、筆記試験及び口述試験で選抜します。 ●書面審査は、「修士論文」について審査します。 ●筆記試験は、外国語科目1科目を課します。 ●口述試験は、「修士論文」及び出願書類を主な資料とします。 「修士論文」を提出できない者については、筆記試験及び口述試験で選抜します。 ●筆記試験は、専門科目（志望する専攻分野に関する1科目）及び外国語科目1科目を課します。 ●口述試験は、受験した専門科目及び出願書類を主な資料とします。
社会人特別選抜 及び 外国人留学生 特別選抜	「修士論文」を提出した者については、書面審査及び口述試験で選抜します。 ●書面審査は、「修士論文」について審査します。 ●口述試験は、「修士論文」及び出願書類を主な資料とします。 「修士論文」を提出できない者については、筆記試験及び口述試験で選抜します。 ●筆記試験は、専門科目（志望する専攻分野に関する1科目）を課します。 ●口述試験は、受験した専門科目及び出願書類を主な資料とします。 いずれの場合も、入学後の教育研究に必要とする外国語能力（外国人留学生にあっては日本語能力）について条件があります。
進学者選考	新潟大学大学院修士課程、博士前期課程又は専門職学位課程を修了見込みの者は、進学者選考により選考されます。詳細は「学生募集要項」をご確認ください。

入学定員

専攻名	入学定員
人間形成研究専攻	6人
共生文化研究専攻	7人
共生社会研究専攻	7人
計	20人

2026年度入試予定

入試の時期	2025年9月	2026年2月	2026年7月
入学の時期	2026年4月	2026年4月 2026年10月	2026年10月
出願資格審査申請期間	2025年7月7日(月) ～7月9日(水)	2025年12月1日(月) ～12月3日(水)	2026年5月11日(月) ～5月13日(水)
出願期間	2025年7月22日(火) ～7月24日(木)	2025年12月15日(月) ～12月17日(水)	2026年5月25日(月) ～5月27日(水)
試験期日	2025年9月12日(金)	2026年2月13日(金)	2026年7月4日(土)

※不測の事態により入試日程が変更となる場合がありますので、詳細は現代社会文化研究科HPで必ずご確認ください。
※7月入試までの合格状況を考慮して、2次募集（8月中旬実施）を行うことがあります。

キャンパスライフ

～在学生からのメッセージ～

現代社会文化研究科に在学中の学生の様子をご紹介します

現在、本研究科で学んでいる学生の声をお届けします。
多様な背景を持った学生の皆さんが、それぞれの目的に向かって日々努力しています。



博士後期課程

人間形成研究専攻 人間形成文化分野 2年次生

樺澤 茉宝 さん
(かばさわ まほ)

「なぜ算数・数学嫌いな子どもが多いのか？」—これは私が大学院進学を決めたきっかけであり、学部時代から感じていた課題です。私はこれまで、新潟大学教育学部で数学教育を専攻し、学びを深めてきました。教育実習や学習支援ボランティアでの現場経験を通して、子どもたちの多くが算数や数学に苦手意識を抱えている現状に直面したことが大学院で研究に取り組みたいと考えるようになった起点です。また、この研究を継続し、世界で活躍できる専門性と人間性を培いたいという強い想いから博士後期課程に進学し、社会課題の解決と教育の仕組み構築に向けた研究に専念しています。

現在は大学院で、数の概念が形成される幼児期に着目した発育発達に関する研究を行っています。保育施設で数的能力や体力・運動能力の測定を行い、その結果に基づいたプログラムの実践や、絵本の開発・読み聞かせなどの活動も展開しています。また、地方自治体や企業と連携をしながら、地域実践型の教育モデルや用具開発に向けたプロジェクトも進めています。これらの活動を通して、子どもたちの「たのしい！」という声を聞くことができ、その声が研究活動の原動力になっています。学生生活は想像以上にあっという間です。「学生だからこそできること」に全力で挑戦することが、学びを深め、世界を広げる鍵になると思います。



修了生の声

田村 優 さん

(たむら ゆう)

現代社会文化研究科 人間形成研究専攻 (2025年3月修了)

現職：立命館大学国際教育推進機構 勤務

2025年3月に博士後期課程を修了後、現在は立命館大学で国際教育担当の講師として勤務しています。異文化コミュニケーションや英語論文執筆に関する授業を週5コマ担当しているほか、留学希望者への相談業務など、多岐にわたる業務に携わっています。学生たちとの対話から日々新たな刺激を受け、忙しくも充実した毎日です。

博士後期課程への進学を決めた当初は、まさか本当に大学で教育・研究に携わる仕事に就けるとは思ってもいませんでした。しかし現代社会文化研究科における先生方や事務の皆さまのあたたかいサポートのおかげで、無事にアカデミアでのキャリアを築くことができました。在学中には、授業、研究、ティーチング・アシスタントなどを通じて、数え切れないほどの学びを得ることができました。

同研究科には、新潟に根ざして調査研究を行う先生や、海外各地で調査研究を行う先生など、多様な専門性を持つ先生がいっぱいいます。地方（新潟県）にルーツを持ちながらも、海外に視野を広げたいと考えていた私にとって、まさに理想的な環境でした。院生の人数が比較的少人数であったこともあり、先生方からきめ細やかな指導を受けることができたのも非常に恵まれていたと感じています。先生のフィールド調査に同行して調査手法を実地で学んだことや、論文についてじっくりと議論を交わした経験は、人数の多い大学院ではなかなか得られない貴重な機会であったと考えます。

こうした大学院での学びは、今でも教育・研究活動を行ううえでの大きな基盤となっています。いつも指導して下さった先生方の言葉を思い出しながら日々の業務に取り組んでいます。これからも、大学院で培った学びと先生方からの教えを胸に、研究者・教育者として一層成長できるよう努力していきたいと思っています！



尹 美蓮 さん

(いん びれん)

現代社会文化研究科 共生文化研究専攻 (2024年9月博士号(文学)取得)

現職：新潟大学経済科学部学際日本学プログラム 勤務



2010年に私費留学生として経済学部の研究生となり、翌年には現代社会文化研究科博士前期課程に進学しました。修士課程修了後は博士後期課程へと進み、在学中に人文学部の特任助教として勤務を始めました。現在は経済科学部に所属し、共通基礎科目から演習科目、さらには初修外国語の授業まで担当しています。また、留学生としての経験と多言語能力を生かし、外国人学生支援や国際交流事業にも携わっています。

私は幼い頃から教師を夢見ており、教えることに強い関心を持っていました。大学卒業後は中国で就職しましたが、日本の大学院に進学できる機会を得たことが大きな転機となりました。「もっと学べる、研究者になれば教師にもなれる」と信じ、新潟行きを決意しました。

大学院での生活は、挑戦と学びの連続でした。発表準備や論文執筆に追われながらも、その積み重ねが自信と力につながりました。研究活動だけでなく、先生方の姿勢から「研究者としての在り方」や「教育者に必要な素質」を少しずつ体得していきました。先生方の助言や仲間との議論は常に刺激となり、「見直し、納得するまで調べる」という習慣を育んでくれました。この姿勢は、今後も私の教育・研究の礎となると確信しています。

また、大学院時代は国際交流活動にも積極的に参加しました。自らサークルを立ち上げ、日本人学生と留学生が共に参加する言語・文化交流の場を継続的に運営してきました。加えて、教育経験を積むため、社会団体や社会人向け中国語講座も長年担当してきました。これらの経験は、現在の教育・研究活動に確実に生かされています。

ここに至るまでの道のりには、苦悩や挫折もあり、決して平坦な道ではありませんでした。多くの方々の支えのおかげで今日に至ることができたことに深く感謝しております。その思いを胸に、屈原の詩句「路漫漫其修远兮、吾将上下而求索」(道は果てしなく遠いが、私はたゆまず探求していく)を心の指針とし、今後も研鑽を重ねてまいります。

〈修了生の進路〉

博士後期課程に在学している学生はその多くが既に有職者ですが(社会人大学院生)、博士号を取得して研究者としての職を得ている方もおられます。



※JR新潟駅から新潟大学までの交通案内

JR	バス(新潟交通バス)	タクシー
越後線 JR新潟駅 ↓(約20分) 新潟大学前駅下車 徒歩約15分	新潟大学行き JR新潟駅 (新潟駅バスターミナル7番のりば) ↓(約45分) 新潟大学正門前下車 徒歩約1分	JR新潟駅 ↓(約40分) 五十嵐地区



真の強さを学ぶ。
新潟大学
 NIIGATA UNIVERSITY

**新潟大学大学院
 現代社会文化研究科**

〒950-2181 新潟市西区五十嵐2の町8050番地

GRADUATE SCHOOL OF MODERN SOCIETY AND CULTURE
 NIIGATA UNIVERSITY
 8050, Ikarashi 2-no-cho Nishiku, Niigata City 950-2181, Japan

お問い合わせ

人文社会科学系大学院学務係(人文社会科学系棟D棟1階)

TEL: 025-262-6166・7895

FAX: 025-262-7457

E-mail: jimugen@cc.niigata-u.ac.jp

Web page URL: <https://www.gens.niigata-u.ac.jp/>